

中国文学

◆読書の快樂◆



井波律子

角川書店

中国文学

江苏工业学院图书馆

藏书章

読書の快樂

井波律子

ちゆうごくぶんがく
中国文学——どくしよ
読書の快樂
かいらく

平成九年九月三十日 初版発行

著者 井波律子
なみ りつこ

発行者 角川歴彦

発行者 株式会社角川書店

〒一〇二 東京都千代田区富士見二一三三



(〇三) 三三八八五二一(営業)
(〇三) 三八一七七八五七一(編集)
振替 〇〇二三〇一九一―一九五二〇八

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

© Risko Inami 1997, ISBN4-04-883493-2 C0095

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上で許されたものを除き禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブックサービス宛にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

井波律子 (いなみ・りつこ)

一九四四年、富山県生まれ。京都大学文学部卒業。同大学院博士課程修了。中国文学専攻。現在、国際日本文化研究センター教授。

著書に、『三國志演義』(岩波新書)、『酒池肉林』(講談社現代新書)、『破壊の女神——中国史の女たち』(新書館)、『裏切り者の中国史』(講談社選書メチエ)ほか多数。

中国文学——読書の快樂 目次

I 中国文化を読む

中国の贅沢と儉約 9

二人の「孫子」 12

中国の理想郷——仙界と桃源郷 15

書物の受難 25

中国の蔵書家・愛書狂たち 29

執念の蔵書家——范氏の書庫「天一閣」について 36

美の伝説 49

II 中国古典を楽しむ

「中国古典選」を楽しむ 59

西遊記 65

阿Q正伝 69

四世同堂 74

水滸伝 78

聊齋志異 79

消え去る女——不在としての美 80

怪異譚にみる中国人の心象風景 87

中国のイメージ・シンボル 91

『山海経』——幻想の力 102

Ⅲ 中国文学・文化を学ぶ

中国文学・文化の受容史 113

幸田露伴 127

幸田文と身体感覚 132

「異界」と現実——夏目漱石 137

心やさしき詩人——大伴家持 142

宮崎史学の魅力 145

「超歴史的」ということ——吉川幸次郎先生 152

吉川幸次郎『三国志実録』 156

小川環樹先生 164

陳舜臣『中国傑物伝』

176

IV 本の宇宙——書評・解説

一九九三年

185

一九九四年

202

一九九五年

220

一九九六年

237

一九九七年

253

あとがき

263

初出一覧

266

中国文学——読書の快樂

装丁
代田
獎

I 中国 文化 を 読 む

中国の贅沢と儉約

三千年の歴史をもつ中国では、皇帝から貴族、高級官僚、文人、商人に至るまで、はなばなしい贅沢にふけた例は、文字どおり枚挙に暇がない。富と力を自らに一極集中させた、秦の始皇帝（前二五九―前二一〇）や漢の武帝（前一五六―前八七）のような古代の皇帝は、多額の資金と大量の人力を際限もなく投入し、豪華な宮殿や墓陵といった巨大な建造物を造営した。彼らにとって、巨大性を誇示することこそが、贅沢だったのだ。

こうした古代的な物量重視の贅沢観を大きく転換させたのは、六朝時代（三世紀末―六世紀末）、政治・文化の主導権をにぎった貴族だった。これら六朝門閥貴族が基礎を固めたのは、短期間ながら中国全土を統一した西晋王朝（二六五―三二六）の時代である。

西晋貴族の間では、恐るべき勢いで贅沢志向が蔓延した。なかでも、贅沢競争のトップグループに属する王愷と石崇の鏖ぜり合いは、凄まじかった。王愷が乾飯でご飯を炊くと、石崇は蠟燭で炊き、石崇が山椒を壁に塗ると、王愷は赤石脂を塗って対抗するという具合だった。今

の感覚でみれば、なぜこれが贅沢かピンと来ないかも知れない。乾飯や蠟燭および山椒や赤石脂は本来、燃料や塗料にすべきものではない。こんなものを燃やしたり塗ったりすれば、おそろしく高くついてしまう。つまるところ、王愷や石崇は、高価な素材を燃料や塗料として、目につかないところで、いかに惜しげなく消費するかを競ったのだ。

こうした西晋貴族のひねった贅沢観は、単純に目にみえる巨大さを誇示した古代の皇帝の物量主義とは、明らかに異なっている。彼らはいかにも貴族らしく、量よりも質を重視し、ニュアンスに富んだ贅沢を追求したのである。六朝以後、たとえば宋代や明代の知的エリートである文人たちが、書画骨董のコレクションや庭園趣味を通して追求しつづけた贅沢のポイントも、洗練された質の高さにほかならなかった。その意味で、贅沢はまぎれもなく中国文化を底上げしてきたといえよう。

王愷や石崇が贅沢競争に血道をあげた西晋時代には、これとおよそ対照的な儉約家も続出した。もともと贅沢と同様、儉約のほうも度はずれであり、吝嗇りんしやくとしか言いようのないケースがめだつ。とりわけケチの権化として名を馳はせるのは、「竹林の七賢」のメンバーの一人、王戎である。王戎のほとんど「芸術的」なケチぶりを示す逸話は数多い。

甥の結婚祝いに衣服をプレゼントしたものの、どう考えても惜しくてたまらず、とうとう代金を請求してしまったとか、娘の婚家に大金を融通したのに、なかなか返済してくれないため、娘が里帰りして来てもプリプリし、返してくれるまで機嫌が直らなかったとか、いうものであ

る。こうして儉約に儉約を重ね、大した財産家になった王戎の最大の楽しみは、深夜、夫人（王戎は恐妻家としても有名）とともに、算盤そろばんをおいて帳簿をつけることだった。ケチの権化とはいえ、王戎の吝嗇のスタイルには、ユーモアのセンスもたっぷり含まれ、陰惨でないところが好ましい。

王戎につづく儉約家として名を馳せるのは、東晋とうしん（三二七―四二〇）の陶侃とうかん（大詩人陶淵明の曾祖父）である。貧窮家庭に生まれ東晋王朝の大立物となった陶侃は、オガクズから竹の切り株まですべて転用するという廃物利用の名人であり、徹底した儉約の結果、巨万の富を築いたという。

総じて儉約のほうは、贅沢ほど多様なスタイルが望めず、文化の底上げをするようなカッコよさもないためか、王戎や陶侃のような有名人はその後、出現しなかった。ただ、今あげたわずかな例においても、石崇は政変の渦中で殺害され、王愷も危うく処刑されかけるという具合に、贅沢の旗手の末路はおおむね悲惨だった。これに比して、吝嗇に徹した王戎と陶侃は、悠々と乱世を生きぬき、まずは平穩に大往生した。ともすれば、欲望過剰の贅沢は自己破壊に、欲望を抑制する儉約は自己保存に、結びつくということであろう。

二人の「孫子」

最近、西安で中国古代の兵法書『孫子』八十二篇が発見されたというニュースが、新聞紙上をにぎわせた。「彼を知り己れを知れば、百戦して殆うからず」という言葉で知られる、あの孫子の兵法である。日本でも昔から愛読された『孫子』は、全十三篇の形で長らく伝えられてきた。ところがこの通行本『孫子』の作者が誰か、実ははっきりしないのである。

古代中国で孫子と呼ばれる兵法家は二人いる。一人は春秋時代、呉王闔閭（前五一四―前四九六在位）に仕えた孫武であり、もう一人はそれから百数十年後の戦国時代、齊の威王（前三五六―前三二〇在位）に仕えた孫臏である。ちなみに孫臏は孫武の子孫だとされる。

孫武はどんな人物だったか。司馬遷の『史記』『孫子吳起列伝』に次のような伝説がみえる。孫武は呉王闔閭と会見するに先立ち、自作の兵法書十三篇を提出した。これを読んで感心した闔閭は孫武を召し寄せ、宮女を兵士に見立てて軍事訓練をおこなわせた。孫武は宮女を二隊に分け、闔閭の寵姫二人を隊長として訓練を開始したが、宮女たちは笑うばかりで、思うように

動かない。すると孫武は、兵士が命令どおり行動しないのは隊長の責任だと、委細かまわず二人の寵姫を斬り殺し、二番手の寵姫二人を隊長として、訓練を再開した。ふるえあがった宮女たちは、今度は命令に寸分たがわず、整然と行動した。これにより、孫武が用兵に長けた軍事家であることを知った闔閭は、彼を將軍に任じたのだった。

かたや孫武の子孫の孫臏も劇的な生涯を送った。兵法家としてすぐれた才能をもつ孫臏は、兵法塾で同門だった龐涓にねたまれて罪におとされ、兩足切斷の刑に処せられた。のちに才能を買われて齊の軍師となった孫臏は、紀元前三四三年、幌の付いた車に乗りこんで齊軍を指揮し、龐涓の率いる魏軍を大いに打ち破り、ついに憎い龐涓を死に至らしめた。

伝説的名声に包まれたこの二人の孫子のうち、古来『孫子』の作者とされてきたのは、先の孫武のほうである。先述のとおり『史記』には、孫武が兵法書十三篇を提出したとあり、この篇数が通行本の『孫子』十三篇と一致することが、孫武作者説の根拠である。しかし、漢代の図書目録である『漢書』かんじよ「藝文志」げいもんしには、孫武著『呉孫子兵法』八十二篇と、孫臏著『齊孫子兵法』八十九篇がある旨、記されている。つまり漢代には二種類の『孫子』が存在したわけだ。だとすれば、その多くが散佚したのち再編集された通行本の『孫子』が、孫武の作なのか孫臏の作なのか、それとも両方がまざったものなのか、決め手がなくなる。

一九七二年、『孫子』の作者問題に手掛かりを与える大発見があった。山東省臨沂県銀雀山りんぎきんかくの漢代の墓から、孫武・孫臏両者の兵法を記した竹簡が大量に出土したのである。これを検討

した中国の学者は、通行本『孫子』十三篇の作者は孫武であるとの結論を出した。

今回、西安で発見された『孫子』は八十二篇とのこと。これは篇数では、『漢書』『芸文志』にみえる孫武の兵法書『呉孫子兵法』八十二篇と、ぴったり一致するものである。篇数だけではにわかには断定しがたいにしても、発見された『孫子』八十二篇が本物ならば、孫武の著作である可能性はきわめて高いと思われる。これを検討すれば、通行本『孫子』の作者を洗いだすことは容易であろう。いずれにせよ、はるか二千五百年の時間を超えて、いま『孫子』はその全貌をあらわそうとしている。なんともスリリングな話ではないか。